

昔話叙述の方法

—小笠原謙吉と佐々木喜善—

石井正己

一、『紫波郡昔話』の刊行まで

佐々木喜善の『紫波郡昔話』（炉辺叢書。郷土研究社、大正十五年一月）は、岩手県紫波郡煙山村（今の矢巾町）の小笠原謙吉から送られた資料に全面的に依拠して成立した。「序」によれば、資料の提供が始まったのは大正三年十月、終わったのは大正十三年八月であった。途中佐々木は「陸中紫波地方の桃太郎」（『郷土研究』、大正五年十二月）を発表したこともあるが、一冊の本にまとめあげるまでには、結局、十年以上の歳月が費やされたことになる。

むしろ、小笠原からの資料が佐々木の研究に生かされたのは、『奥州のザシキワラシの話』（炉辺叢書。玄文社、大正九年二月）の方が早かった。「三 手紙で答へられたもの」の「有ると云ふ地方」の中に、（一四）と（一五）が「小笠原謙吉氏状」として載っている。末尾の「一月二十九日附」は、他の書簡から見て、大正八年のことと思われる。佐々木は、この年の初め、青森・岩手・秋田・宮城・山形・福島各県の人々に対し、ザシキワラシに関する報告を求めるらしい。その相手の中に小笠原も入っていたことになる。

しかし、この依頼は、『紫波郡昔話』とは別件としてであったと思われる。

佐々木が資料を整理し始めるのは、大正十年であった。「日記」の二月二十二日には、「今日カラ紫波郡ノ古譚ニ移ル」とある。しかし、すぐに『紫波郡昔話』を刊行する運びにはならなかつた。単行本としては、その前に整理が進んでいた『江刺郡昔話』（炉辺叢書。郷土研究社、大正十一年八月）が先に出された。これは、大正九年、岩手県江刺郡米里村（今の江刺市）の炭焼き朝倉利蔵の来訪を受け、その話を中心にまとめたものである。結局、『紫波郡昔話』は後回しにされてしまった。

この昔話集が刊行に向けて動き始めるのは、柳田が欧州から帰つて、大正十三年になつてからであった。柳田の七月十日の書簡には、「紫波郡昔話ハなるだけ早く出して見たいと思ふ 早くまとめて御遣し被下度候」「とにかく早く紫波郡昔話御完成を乞申候」とある。⁽²⁾ この書簡を受けて、佐々木は刊行へ向けて、小笠原にもつと話を送ってくれるように依頼したらしい。それに応えて、小笠原がひとまず資料を書き上げたのは、後述する小笠原の資料によれば、七月二十二日に「昔話を集めた後に」を書いた時であった。その後、

若干の資料を追加して、八月には資料の提供が終わっている。

一方、柳田は、八月十日の書簡で、「紫波郡昔話まつてゐます」と求め、十月十一日の書簡では、「胆沢郡昔話の方でもよろしけれと早く出来ないともう叢書が出せなくなるかも知れない」と催促している。それに対して、佐々木は少しづつ原稿を書き進めていたようだ。後述する小笠原の資料Bの末尾には、「第何回目かの精書、（多分まとまとた草稿としては二回目か）大正十三年十二月十日稿了す。」という付箋がある。

しかし、大正十四年一月、佐々木は土淵村村長に当選し、なかなか原稿を書くことができなかつたらしい。結局、『紫波郡昔話』の原稿が柳田に手に届いたのは、九月に入つてからであった。五日の書簡には、「紫波郡昔話の稿たしかに落手、口碑の部は続篇をなす覚悟で先づ此分を出版の支度を致候に付序文を半月位のうちにお遣通した。十三日の書簡には、「紫波郡昔話全部拝見の上愈々本日活版所へ渡し候に付十日位の間に序文御遣し下さるべく候」とある。柳田はほどこの本の出版を急いでいたらしい。

柳田が佐々木の原稿に対しても加えた作業は、十三日の書簡によれば、大きく二つある。一つは、「江刺郡昔話よりもまとまりよしく且半分ほどは殆ど蒐集の模範とも為すべき完全なるものに有之候も他の数十篇は大に劣り候やう存候、其中最も賛成しがたきもの一つ即ち学者と狐の話を抜き去り申候、是ハ近頃の作り話なるに、それを小説風に書かれしは甚だしく氣持わるく候ひし也、又末の二小

篇はあまり無内容なりし故削り申候、あれも民話なりや否や疑はしく候、今一つ中程で三代目、四代目といふ話、此も変なものなれども何か古い話の破片なるべしと存し残し置候」という部分である。佐々木が送った原稿をすべて載せるのではなく、「学者と狐の話」「末の二小篇」と削り、「三代目、四代目といふ話」を残すという判断を加えているのである。残された話の「三代目、四代目といふ話」とは、『紫波郡昔話』の「（一〇六）三代目長者と四代目長者」を指す。削られた話については、後述するが、興味深いのは、「近頃の作り話」や「あまり無内容なりし」話は削り、「何か古い話の破片」は残すという取捨選択が見られることがある。こうした基準が成り立つ背景には、昔話の中に神話の面影を求めるようとする思想の確立があつたと思われる。

もう一つは、「全体に文字の使ひ方精確ならず、漢字に誤甚だ多く候、此次ハ必ず言海を座右に置き少しでも疑はしき字は御参照被成べく、さうで無いと世間ハ小生の如く貴兄の為に忠なる者のみに非されハ必ず一度ハ失敗なざるべくと存候」と、「会話を土地の詞にせられしは非常にうれしいことなり又学問の為にも価値あることなれともさうすれば他の部分にも土地の普通人が決して使はぬやうな詞を避けねばならぬのに、「何々である」といふ類の演説口調がまじりを氣になつてたまらず、それを一々訂正してなるべく村の人々の口から出たことばに近いやうにいたし置候」という部分である。これは、柳田が佐々木の文章に書き加えた訂正に関する理由を説明したものである。それによると「文字の使ひ方」の誤りと「「何々

二、柳田国男が返した原稿

である」といふ類の演説口調とを直したことになる。前者には單純な問題しかないが、後者には柳田の持っていた昔話の文体觀が出ている。これはその前で、「会話を土地の詞にせられし是非常にうれしいことなり又學問の為にも価値あることなれ」と褒めているのと対比されている。柳田は「土地の詞」を地の文にまで及ぼして、「なるべく村の人の口から出たことばに近いやうに」書き直したのである。それは、昔話の文章化に關わる言文一致の問題であった。

結局、佐々木は、その「序」を、娘の若入院させていた花巻の星医院で、九月二十二日に書いている。しかし、後述する小笠原の資料Cの末尾には、「此分大正十四年九月十八日 花巻星医院で稿ヲ結ぶ。」という注記が残されている。「此分」というのは、明らかに資料Cのどこかを指している。原稿はすでに活版所に渡されてしまった後なので、九月十八日に「稿ヲ結ぶ」というのはわかりにくい。推測の域をまったく出ないことだが、佐々木は資料集Cの末尾の「阿野様」「門前の家婦」「ドントの虎と古屋のムル」の三話の原稿を書いたのではないか、と考えている。後述するように、「門前の家婦」の原稿は柳田によつて抜き取られたが、「阿野様」「ドントの虎と古屋のムル」の二話は、『紫波郡昔話』の最後の二話に当たるからだ。

柳田が送った二十六日の書簡には、「紫波昔話ハ愉快な著作として永く残り可申うれしく候」とあり、「序」のことも何も出てこない。しかし、「病院からの御手紙」には、佐々木の書いた「序」の原稿と、おそらく追加の原稿とが入つていたと思われる。そして約

柳田の九月二十六日の書簡は、「又病院からの御手紙御病人尚悪くて御出候哉心配に存候 御難義御察し申候 「民族」の準備にて夜もおそらく迄働きをり候 紫波昔話ハ愉快な著作として永く残り可申うれしく候」とあるのが全文である。しかし、その封書には、この墨書きの書簡一枚の他に、佐々木が『紫波郡昔話』に載せるために送つた原稿十枚が返されていた。すべて四百字詰の用紙で、佐々木が一話ずつ黒インクで清書し、その後、朱筆を入れて、それを読んだ柳田は、その時に赤インクで手を入れ、そして、原稿を返送する時に墨で書き入れをしている。以下、この返された原稿について、柳田がそう判断した理由を考えてみる。

一枚目は、左側の頁に「謹んで此書を小笠原謙吉氏に贈る」とある。佐々木が『紫波郡昔話』に載せようとした献辞の原稿であったことがわかる。右側の頁に、柳田が墨書きで、「序文ヲ見レハ此頁以上ナリ 故ニコレハ却ソテ無キ方ガヨロシ 寧ロ小笠原君ト共編セラレテハ如何御一考アリ度」と忠告している。「序文ヲ見レハ此頁以上ナリ」というのは、冒頭の「此集の資料の殆ど全部は全く紫波郡煙山村の小笠原謙吉氏から頂戴したものである」などという内容を指している。墨書きであるから、返す時に書かれたものだ。柳田は、「序文ヲ見レハ」とあるので、序文を読むまで、そうした

事情をまったく知らなかつたようだ。九月十三日の書簡に、この献辞に關する内容がないことからすると、この原稿は序文とともに送られた可能性が高い。結局、柳田の忠告を佐々木は断つたらしく、『紫波郡昔話』の奥付は「著作者 佐々木喜善」とあるだけである。⁽³⁾

二枚目から十枚目は、すべて昔話の原稿である。一枚目から四枚目は「（五三）狐に誑された先生」。これは、先生が噂の高い古狐

から隠れ蓑と隠れ笠を貰い受け、それを着て妻をからかおうとするが、着ていたのは洗濯したばかりの湯巻だった、という話。柳田は赤インクで、上の欄外に、「此話ハ作り話ナル上ニ 話シ方モ我々ノ趣意ト一致セス 除キ度（柳田）」と書いてある。さらに墨書きで、右の欄外に、「コンナ書キ方ダツタラ 如何ナル話デモ集メテオク価値ナシ」として、その左上の欄外に、「書キ方モワルシ」と念を押している。これは、九月十三日の書簡に、「最も賛成しがたきもの一つ即ち学者と狐の話を抜き去り申候 是ハ近頃の作り話なるに、それを小説風に書かれは甚だしく氣持わるく候ひし也」とあつた、その「学者と狐の話」である。この話は、後述する小笠原の資料Fによれば、「○乙部村手代森小学校長市村直躬氏の『吾が地方に伝へられる昔話』の写である」ことが知られる。

五枚目は「（一一〇）人間の始まり」。これは、爺と婆とが小坊様の指示に従つて、余った所と足りない所を合わせて子供ができるた、という話。柳田が墨書きで、右の欄外に、「コレハアマリニ無

内容、且ツ古キモノニアラズ」として、左側の頁に、「実ニ不思議デタマラヌ」ハ アル話ハ光ツテキルホドオモシロク アル話ハ小

学生ノ話ノ如シ 本ニナツタ上デ細カク評ラシタイト思フ 恐クハ年数ノカヽツタ為ナラン」という感想を述べている。この話を書いた人は、末尾に「高橋仁太郎」と記されている。後述する小笠原の資料Aには、「高一 高橋仁太郎」とあって、煙山尋常高等小学校の高等科二年生であったことがわかる。柳田の推測は、的中していることになる。

六枚目は「（一一一）昔斬」。これは、爺と婆、か秋振舞に呼んだ孫子の喜ぶ様子を眺めて、にこにこ笑っていた、という話。柳田は墨書きで、右の欄外に、「コレモ昔話トハイフベカラズ」として、左側の頁に、「校正ガ行ツタラスク見テ送ソテ下サイ ヒマヲトルト困ル人ガ沢山ニキルカラ」と書いている。後半は昔話集から除く理由ではなく、校正の作業を速やかに行なうようにといふ指示である。この話を書いた人は、末尾に「野市太郎」と記されている。後述する小笠原の資料Bには、「高一 中野市太郎」とあり、煙山尋常高等小学校の高等科一年生であったことがわかる。「野」は「中野」の誤り。この話は、昭和六年の『聴耳草紙』に、「九〇番 爪と婆の振舞」として入れられている。提供者は「中野市太郎氏、當時尋常小学校生徒」とあり、さらに「紫波郡昔話を編む時に集つた資料を、余りに無内容だと思つてはぶいて置いた物である」などという注記がある。⁽⁴⁾

以上の二話は、「（一一〇）」「（一一一）」という番号があるよう、『紫波郡昔話』の末尾に置くように考えられていた。九月十三日の書簡で、「末の二小篇はあまり無内容なりし故削り申候

あれも民話なりや否や疑はしく候」と推定しているが、この二話が「末の二小篇」に相当することは、その番号から見ても間違いない。

七枚目から十枚目は「門前の家婦」。これは、和尚が小僧に門前

の家婦との情事を立ち聞きされ、判じ物でやりこめられて、ついに逃げ出した、という話。柳田は墨書きで、右の欄外に、「コノ話ハ

無理ニ保存スルホドノ価値ナシ、又秘密出版デモシナイト六カシ

実ハ此類ノ話ハ「マダ多イ筈」と述べている。佐々木の原稿は話に番号を付けてあつたと思われるが、この話には番号がない。なぜこの話が配列から漏れていたのか、その事情はよくわからない。しかし、前述したように、この原稿が後から追加されたものだと考へると、他の三話にある番号がこの話にだけない理由は説明できる。柳田が「無理ニ保存スル」と言つてゐるが、「無理ニ」という表現は追加を意味すると考えれば、理解しやすい。後述する小笠原の資料Cから、小笠原自身の伝承であつたことが知られる。

結局、佐々木が送つた原稿から、「狐に誑された先生」「人間の始まり」「昔漸」「門前の家婦」の四話が抜き取られたことになる。

「狐に誑された先生」は「作り話」を「小説風」な「書キ方」で書いたこと、「人間の始まり」「昔漸」は「無内容」であること、「門前の家婦」は「無理ニ保存スルホドノ価値」がないことが、抜き取られた理由であった。「門前の家婦」が「秘密出版デモシナイト六カシ」というのは、それが色話であることに由来している。

「人間の始まり」もその類の話であることは、言うまでもない。

こうして佐々木の原稿を読むことは、柳田を次第に昔話研究へと

引き込んでいったのではないか、と思われる。柳田が吉右衛門会といふ昔話研究の会を発足させるのは、『紫波郡昔話』刊行の半月後、大正十五年二月のことであつた。⁽⁶⁾

三、小笠原謙吉資料の内容

小笠原から佐々木に送られた資料七冊が、今も残されている。ここでは、書誌を詳しく述べることができないが、その概要だけでもとらえておきたい。この七冊を仮に資料AからGの記号を付けて呼ぶ。そこに載せられた話は、すべて本稿末尾の表にまとめてある。

小学生の文章については話名のないものが多いので、基本的に冒頭の一節で示し、小笠原の文章については、各話の前にある話名で示した。

資料Aは、小学生が書いた文章を綴じたもの。二十九丁、三十話からなる。二十六丁分が墨書き、三丁分が鉛筆書きである。第20話の冒頭に佐々木の字で「○昔話の材料」とあるので、第19話までの前半（十九丁）と第20話からの後半（十丁）とに分けられる。これらは、二つに分かれていた可能性が高い。前半には名前が見えないが、後半には「高一 高橋ろく」「高一 藤田留藏」「高一 五日市定八」「宮崎九郎」「高等科第弐学年 野中參藏」「高二 高橋仁太郎」という名前が見える。名前がないものが多いので、これらはアンケートとして求められたものらしい。第4話の末尾に、「煙山尋常高等小学校」とあつた。幸い、煙山小学校に、大正三年度高

等科第一学年の『修業証書台帳』が残っていたので、「高橋ロク」「藤田留藏」「五日市定八」、そして後述する資料Bの「中野市太郎」の名前が確認でき、これらの文章が大正三年度に書かれたことわかった。小笠原から資料の提供が始まつたのは大正三年十月なので、それから約五ヶ月以内に書かれたものらしい。佐々木が「陸中紫波地方の桃太郎」を発表したことは前述したが、それは第21話を書き換えたものであつた。小笠原からこれらの文章が送られたのは、発表以前のことになる。

資料BからGはほとんどすべて小笠原によつて書かれている。資料Bは、冒頭に「わたしの小兒の時冬の火達で祖母様から聞いた昔話 煙山村 小笠原迷宮」とあり、四十一丁、二十五話からなる。

しかし、その中の第12話と第16話とは小学生の文章である。第16話には、「高一 中野市太郎」の名が見える。この一冊は、綴じ穴や原稿用紙から見て、もとは第1話から第9話（十五丁、墨書き）、第10話と第11話（六丁、墨書き）、第12話の小学生の文章（一丁、墨書き）と第13話（三丁、赤インク、「岩手日報原稿用紙」）、第14話と第15話（六丁、墨書き）、第16話の小学生の文章（一丁表、鉛筆書き）と第17話から第25話（一丁裏と九丁）くらいに分かれていたものと推定される。第25話の末尾には、朱筆で、「註。今度の分も先の分も昔話の題目は皆自分の勝手に付けたもので、固有のものでは無い。それから文中にはどうしても固有色は出せない。全くクチしたものである。——（迷宮生）」とある。小笠原から提供された資料を、佐々木が順番に綴じ直して一冊にしたのである。こ

の順序からすると、小笠原は佐々木に二回目を送つた後に、煙山尋常高等小学校の児童の文章を入手したことになる。

資料CからGはすべて万年筆で書かれている。資料Cは、「冒頭に『紫波郡内に於ける口碑伝説及昔話集（一）』とあり、「目録」があり、本文が続く。三十四丁、三十七話からなる。第二丁表の冒頭に、「紫波郡内に於ける口碑伝説及昔話 小笠原謙吉」とあるので、第一丁は原稿を一冊に綴じる時に「目録」として書き加えられたらしい。「目録」の末尾には、「此の外目下処三十計の昔話の資料を案じて居ります。」と書かれている。

資料Dは、「冒頭に『紫波郡内に於ける口碑伝説及昔話集（二） 小笠原謙吉』とあり、「目録」があり、本文が続く。四十二丁、三十五話からなる。「目録」の末尾には、「翻 題名はあたつて居ないもの又アテ字が多い筈であるから、御訂正を願ひます。私は単に資料を正直に差上げる意味にて書いたのですから、其のつもりに願ひます。」とある。

資料Eは、「冒頭に『紫波郡内に於ける口碑伝説及昔話集（三）』とあり、目録があり、本文が続く。三十一丁、二十九話からなる。第20話の末尾に、「以上大正三年以降差上げたる資料は皆自分が從来祖母から聞いたもの今父母からきく直したもの計りである」とあり、そこまでが小笠原自身の伝承。しかし、第24話の末尾には、「以上赤沢村の本間龜松の報によつて書く」、第27話の末尾には、「以上三篇志和村佐久山孝之助氏報原文」とあり、該当の話は報告にもどづく。また、第28話は、「此の事は今回の資料としては如何と思ひしも差

上げたのですが今其の蒼前の由来を次に記す」、第29話は、「此の一編は自分の祖母から聞いて知つて居た昔話」とあり、やはり小笠原自身の伝承。この時期になると、小笠原は、祖母から聞いた伝承を父母から聞き直したり、思い出したりしながら書いている。それとともに、周囲の人々から伝承を集め始めていることもわかる。

資料Fは、冒頭に「紫波郡に於ける口碑伝説昔話集（四回）」五回とあり、「目次」がある。四回は三十一丁、四十三話からなり、五回は四丁、七話からなる。この「五回」は、佐々木による朱筆。これは四回と五回の合冊になつていて、四回に当たるのは、四十三話と「昔話を集めた後に」という文章である。第14話の末尾には、「○以上は乙部村手代森小学校長市村直躬氏の『吾が地方に伝へられる昔話』の写である」、第21話の末尾には、「○以上長岡村小学校長竹内次郎氏の報原文のまゝ」、第23話の末尾には、「○以上長岡村遠山分教場本間亀松氏の報原本のまゝ」、第30話の末尾には、「○以上徳田村小学校長戸塚玉司氏の報原文のまゝ」、第32話の末尾には、「○以上は乙部村手代森小学校長市村直躬氏の直話」、第36話の末尾には、「○以上徳田村役場にて聞いたもの」、第40話の末尾には、「○以上不動村小学校長広田勘次郎氏より直話」、第43話の末尾には、「以上は私の知れる限り」とある。続く「昔話を集めた後に」は、六話の昔話が思い出せないこと、佐々木の『江刺郡昔話』と小池直太郎『小谷口碑集』（炉辺叢書。郷土研究社、大正十一年）と同型の昔話があること、祖母（天保三年～明治二十三年）の語った昔話が土地に根づいた時代のことを述べ、「其の後佐々木

氏の御手紙には「此の話が世に出たら日本の昔話の古い原型なども自然と解るかも知れません。話の々に貴方の御感想なりを御書き被下たらどんなに喜ばしいことでせうか」と謂はれたが、私には今の自分には何も一々に対する感想は書けるものではない。たゞ単に最も忠実なる資料を集めると云ふ事に就て努力したいのであつた。依て資料を差上げたものゝ全部は採用下さらなくとも、又見出しや用語には御遠慮なく御訂正あつても、それは自分の希望する處であるから——どうにでも早く本に出て下さるのを一日も早く願つて置きたいのである」と結んでいる。小笠原が昔話を書くことは、これまで一区切りがついたのであった。「大正十三年七月廿二日炎天の日」のことであった。しかし、さらに「（五回）」の原稿が続く。第48話の末尾には、「○以上長岡校長竹内次郎君の報告そのまゝ」、第50話の末尾には、「○以上は私が知つて居た分を更に思ひ出したものであります」とある。

資料Gは、冒頭に「紫波郡昔話資料集（自分の思ひ出したもの）」

とある。「二十五丁、十五話からなる。第7話までの前半には目録があるのと、第8話からの後半とは別であつたらしい。第15話の末尾には、「以上の話は総べて祖母から聞いたものであつたけれども、思ひ出せないであつたのを今度大きな妹は幸い家に来たので其の話をきいて見ると、知つて居たものであるから書いたのであります。」などとする。「八月三日朝」のことであつた。これは大正十三年で、この資料が最後に送られてきたものであつたらしい。

佐々木は「序」で、「小笠原氏の資料は、其大半は氏自身の記憶や

御家族から聴かれたもの、其他は私の為にわざ近郷の小学校の

教師や生徒等から集めてくれられたものである」と述べていた。小

笠原の資料は、そのとおりの内容のものであった。また、「其端緒は

大正三年秋十月頃から始まつて、大正十三年八月まで約十ヶ年間、

一度に十篇五篇、一番少い時には三篇多い時には四十余篇と纏めて、時々折折の書状の中に、又は原稿で送られた」という。資料が提供された時期や形態も、ここに述べられたとおりであった。さらに佐々木は、「其数は總て二百七篇あつたが、其中口碑伝説の部類に入れるのがよいと思はれるもの其他此集の譚と著しく重複したのものや、又は其断片かと思はれて、さう価値の有さうにも思はれぬものやは

除き、この百十五篇だけを輯めたのである」と記している。「二百七篇」という話の数え方は根拠がよくわからない。「目録」ではなく、本文で数えると、二百二十一話となる。そして、本稿末尾の表に示したとおり、『紫波郡昔話』の「百十五篇」の話はすべて、この小笠原の資料をもとにしたものであった。「此集の資料の殆ど全部は尽く

紫波郡煙山村の小笠原謙吉氏から頂戴したものである」という「殆ど全部は尽く」はやや曖昧で、「全部は尽く」と述べてよかつた。⁽¹⁰⁾ なお、「口碑伝説の部類に入れるのがよいと思はれるもの」のうち四十四話が、後に「鳥虫木石伝」(『旅と伝説』、昭和五年一月六月。四回)に発表された。連載の最初には、「此の度の話の全部は、岩手県紫波郡の口碑である。總て先年郷土研究社から出した『紫波郡昔話』の資料蒐集の際に、同郡煙山村現村長の小笠原謙吉氏から頂戴したものである。其の中の一部分を列記して見ました。」

と述べている。⁽¹¹⁾

四、佐々木喜善の書き換え

佐々木の書いた「序」には、「とにかく全部が同氏の御骨折で出来上つたもので、私は單なる從者であり筆記者であつた事を、こゝに明言して置く」とある。『紫波郡昔話』は提供された資料から約半數にあたる「百十五篇」を抽出し、配列し直したものだつた。しかも佐々木は小笠原の資料を大きく自分の文章に書き換えている。それに對して、後に小笠原は、『紫波郡昔話集』(全国昔話記録。三省堂、昭和十七年)の「後記」で、「それが上梓され目を通すと、失礼な

言葉だが内容は大分佐々木型の昔話になつて居て、紫波郡の昔話としては特質を失つたものは多いので——これには充分理由のあることであると思ふも、出来ることならば私の手でもう一度書き直して見たいと考へた事は無いでもなかつた」という感想を書いている。

「佐々木型の昔話」になつてているという指摘を、どう考えればよいのであろうか。本来ならば、小笠原の資料と『紫波郡昔話』とのすべてについて、その叙述をつぶさに検討しなければならない。しかし、ここにはその紙幅もないでの、いくつかの事例を比較することによつて、おおよその見通しを立てるに至る。小笠原の資料は、すでに見たように、小学生の書いた話、教師から報告された話、小笠原が記憶を書いた話に大きく分けられる。以下、その三種の話を引用し、佐々木がどのように書き換えたのかを明らかにしてゆく。

(a) 小学生の書いた話の事例「昔話し 大僧とこぞの事」(Aの18)

お寺が有り、こぞ「右に別筆で、傍線をして「小僧」は、山に行きて来て、大僧に、ほづきの木に、鷹が巣を造つて、居ますといへました。大僧は、うそと思つて、こぞに、ほづきの木に、鷹が巣を、造つて居るのを、取つて来たなら、馬八ひきがれるといへました。こぞは山にいって、ほんぬ木と、つ木の木に鷹が、巣を造つて居るのを、取りて大僧にやりました。大僧はよがらめく、馬の尾にはちをつなぎ、其の馬をひき、「い」の上から重ね書きして、こぞにくれたと云ふことがあります。

この文章は稚拙ではあるが、小学生が昔話を苦勞して書いたものとして貴重である。特に「大僧」「こぞ」といった表記は、音声として享受されてきた言葉を文字にしようとしたものだ。昔話を文章化する難しさが実によくわかる資料だ。

これは、『紫波郡昔話』の「(三八) 酸漿の木に鷹の巣(和尚と小僧譚其二)」に書き換えられたと推定される。それは、次のような叙述になつてゐる。

或時小僧は山に往つて来て和尚に、今日俺は山で酸漿の木に鷹の巣が食つてあるのを見て來たと言つた。和尚は笑つて、ほんにかそだらそれを取つて來う、そしたら俺はお前に馬八疋遣るがと言つた。

小僧は山に往つて、朴の木と楓の木と何かの鳥の巣を取つて来て和尚に見せた。そしてさあ和尚様早く約束の馬八疋を呉れるとせがんだ。和尚は応々と答へて裏廄からひどい瘦鳥の尻尾

に蜂の胸中を結び着けて、そら馬八疋と言つて小僧をへこませた。

これは、地の文を共通語、会話を方言にして、読みやすい文章にしている。しかし、問題もある。漢字に振り仮名がないために、作文の「こぞ」「ほづきの木」「ほんぬ木」という音声は消え、「酸漿」→「朴」「楓」、「馬八疋」→「馬」「蜂」の音声の関連もたらえにくく。小学生が「ひいて」をわざわざ「ひきて」に書き直したのは、「疋」との関係があつたからであつたが、これを「結び着けて」と書き換えたのでは、意味をなさない。

(b) 教師の報告した話の事例「(一)ばかむこ」(Fの1)

昔ばか婿ありけり。曾てさる柔術師にその方式を教へられ居れり。屈みて来れるならば斯くなん、反りて来られるならば斯くなんとは、あやしくも心してけり。ここにものすることやありけむ、しうとどになん行きける。良うこそ来ましたれ、先々入らるべしとてしうとめ迎へたるに、おのれ屈みたればこそと引かつき、物の見事に投げ遣りぬ。物音のあまりけたゞましきに、岳翁の来りにたれば、くは反りたると眼がくす打ちつつ、たぢろく腰をうんとばかり踏みてければ、おびたゞしき尻餅つきけり。やがて咳ばらひなどしつ。是こそおのが日比の手練にてと、鼻うごめかしてなん帰りける。(石井が句読点を改めたところがある)

これは、「乙部村手代森小学校長市村直躬氏の『吾が地方に伝へられる昔話』の写」の中の一話である。「写」とあるので、市村が

書いた稿本を見て、そのままに転写した文章であった。一目瞭然、文語体で書かれていた。文語体も一種の共通語であり、ここには方言がまったく出て来ない。

これは、『紫波郡昔話』の「(七四) 柔術(馬鹿聾斬其五)」に書き換えられた。末尾に「市村直躬氏報告の分」とあるので間違いない。それは、次のような叙述になつていて、

柔術を稽古したのでかけて見たくて仕様がない。師匠から

兼々屈んで来たのならこの手、反身にはこの手と教へられて居たので、馬鹿聾は秋振舞に招ばれて舅家に行つた時、聾殿がよく來たとて姑は玄関に出てお辞儀をするのを、をのれ屈み手で来るなと言つて、引摺いで物の見事に敷石の上にどつと投げつけた。其物音に驚いて舅は何事だと出来たのを、をのれ反身で来る気かと言ひざま、眼匿しを打つてよろめく老人の腰をうんと蹴飛ばすと、舅はひどく板間に尻餅をついた。いく手だと馬鹿聾は鼻をうごめかして家に帰つた。

この話では新たに「秋振舞」という具体的な状況を設定し、しかも読みやすい口語体に書き換えられている。

(c) 小笠原が記憶を書いた話の事例「一福の神『ヨケナイ』」(Bの1)或る年旅渵に行つて門松を向けてましたら、淵の水はクルクルと渦を巻いて這入るので、つい此の門松を入れて見たらと思ひまして、入れてましとクル／＼とまわつてチブンとすべみました。ハテ面白いと思つてまた一本取つて入れましたら、矢張りクル／＼とまわつて中へ這入りました。ハテ又一本を取つて入

れて見ましると、淵の中からお姫様は出て参りました。そうして貴方に門松を入れてもらつて大曾喜んで居りますからトウゾ私の宅へお出で下さいと云ひました。ドウして此の淵の中へ這入られようと謂ひましたと、何それは妾の背中せなかへオブツアツて目をフクて居るとわけはありませんと云ひまして、お姫様にかたつて行きましと、道中でお姫様は妾の宅へ参つたら、キツト貴方に何か上げませうから、其時『ヨケナイ』をほしいと云ひないと教へられました。そうして参りましと、目を開けなさいと云ふから開けて見ましると、立派なお家へ参つて居りました。そうして門松のお礼を云はれまして、色々の御馳走になつて、それからお礼に何か上げましから、何をほしいかと云はれましたから、教へられた通り『ヨケナイ』をほしいと云ひました。スルト『ヨケナイ』は二つとない宝物だが門松のお礼として上げませうと云つて、カブクレガキを呼んでくれました。コンナものと思つたけれども仕方なくもらつて参りまして、其の『ヨケナイ』は途中で私は参つたらどこか人の見ない所に置いて下さいと云ふから、家へつれて来てデコ(農家のまづしい處では座敷の代りに物置や□□もの)に入れて置きました。そうするとの『ヨケナイ』は一人で非常にカセギました。スルト米櫃に米は一杯たまり、財布にいつでも錢は這入て居るやうになりました。是非に喜んで妻にも知らせず、毎日山に参つて帰つてはソツとデコに行つて見て、ニカツと笑つて参り参りして居ると、妻は常に不思議にして夫は何しにデコへ行つて

笑つて居るかとあやしんで、或る日留主にデコに行つて置を取
除けて見ましたが、何も居りませんでした。ハテ何も居らぬ筈
がながと思つて、隅々をはいて見まると、クサレカブクレガ
キがよちやくと出て参りました。すると一見してもいやらし
いものが出たので、夫はこんなものをつれて来て置いて喜んで
居つたと思つて、それを掃でウンとたきつけて、泣かせて追
つてやりました。夫は山から帰つて来ていつものやうにデコへ
行つて見まると、『ヨケナイ』は居りませんでしたから、顔
の色をかへて心配して、妻にデコを見たろうと云ひました。す
ると立腹して居た処であるから、見るも何もあんなものをつれ
て來てけしからんと笑へました。するとそれをどうしたと云ひ
ましと、掃でたたいてやつたら何處かへ行つてしまつたと云ひ
ました。夫はそれは大変なことをした。あれは『ヨケナイ』と
いつて福神であつたがといつて力をおとしました。其の日から
米もへり錢も無くなつて、素の通りのビンボウになつてしまつ
たと云ひます。

註、笊淵といふのは煙山村字煙山に在る有名な南昌山の一奇蹟
であります。民俗に昔八幡太郎が貞任征伐の居り、貞任が此の
山から毒を流し（南昌山は近年まで毒ヶ森と云ひました）た為
め、太郎勢は此の水を呑んで多く死しました。で太郎は此の淵
へ笊を立てゝ毒をこして兵隊に呑ませました処が、淵となつた
と云つて、今も此の山の一奇蹟であります。（石井が句読点を
改めたところがある）

全体にわたつて、方言を取り込みながら、話の口調を文章に生か
す工夫をしている。しかし、デス・マス調の文体を取つている。果
たしてそうした語り方をしたのかどうか、わからない。提供する資
料という制約が作用して、こうした文体になつたのかもしれない。
これは、『紫波郡昔話』の「（一）福の神よけない」に書き換え
られる。それは、次のような叙述になつてゐる。

ある百姓が正月の門松迎へに南昌山に往つた還りに、笊淵の
所に来ると、水がくるくるといかにも面白く渦を巻いてゐるの
で、抱いて居る松枝を一本其の所に投入して見た。すると其松が
くるくると廻つてチズンと沈んで往つた。はてこれは面白いと
思つて、又一本取つて投入されると、それもくるくると廻つて中
に入つて行つた。はて又一本取つて入れると、それもくるくる
と廻つて沈んで行つたが、其時淵の中から美しい娘様が出て來
て、今の門松の礼を言ひ、是非私の家まで来て下さいと言つた。
男はどうして俺が此水の中に入られやうかと言ふと、娘はそれ
は何の訳が無い。たゞ私に負さつて目を瞑つて居るとよい。
たゞし途中で目を開いたら、忽ち溺れてしまうから其つもりで
居なさい。そして私の家に往くと、私の父はお前に何か礼に上
げると謂ふから、其時は何も入らぬ、たゞヨケナイを欲しいと
言ふがよいと言つた。

其男は娘様の言ふ通りになつて居ると、もう眼を開いてもよ
いと言ふ。眼を開いて見ると、自分はいつの間にか見た事の無
い立派な館の前に来て居た。これは私の家だから入れと言は

れて内に上ると、至極品のよい老翁が出て来て、此所でも改め

て門松の礼を言はれ、それから色々な御馳走を出された。そして何か御礼に差上げたいが別に望みが無いかと言はれたから、男は娘から教はつた通りにヨケナイを欲しいと言つた。すると老翁は其ヨケナイと謂ふものは此所にも二とない宝物だが、御所望とあれば仕方が無い差上げようと言つて、次の室から一人の見にくいカブキレ童を呼んで与へた。男はこんな物をとひどく迷惑に思つたが、今更仕方無いから貰つて、又以前のやうにして娘に送られて淵の岸に還り上つた。

其ヨケナイは家に帰る途中で、私が参つたなら何処か人目につかぬ所に置けと言ふから、男は家の中の一番奥のデコに入れ置して置いた。すると其童は朝晩独りでよく働くので、忽ち其家の米櫃には米が一杯になり、財布には金錢がいつでも絶えぬやうになつた。これでは男は嬉しくて堪らず、毎日山に往く時や帰つて来た時には、そつとデコに入つて、ヨケナイの無事な顔を見つけて、頭を撫でてやつてニカツと笑つて出て来るのであつた。

それを見た婢は、これは怪しい、夫は何しにデコに入つては笑顔で出て来るかと睨んで居た。或日夫の留守に、デコに行つて物を取退けて見たが何も居ない。はてこんな筈が無いがと隅々を片付けて見ると、隅の方からひどく醜怪いカブキレ童がちよこちよこと出て來た。一目見ると本当に嫌らしいので、筛でうんと叩きつけて泣かせて追出した。童はおいおいと泣き

ながら山の方に行つた。

夫は山から帰つて来て、いつものやうにデコに入つて見るに、ヨケナイは居なかつた。顔色を変へて心配して出て来て、娘はデコを見たなと言ふと、娘はまだ腹が立つて居たところだから、見るも見ないもんだ、お前は何所からあんな化物を連れて来てけじかるてヤと罵つた。夫は悲しんでそれで彼の童をどうしたと言ふと、前幕で叩きつけて追出すといよい泣きやがつて山の方さ往つたけど娘は言つた。夫はそれは大変な事をして呉れた。あれはヨケナイと謂うての福の神であつたがと言つてひどく力を落とした。其の日から米櫃の米も減り財布の錢も無くなつて元々通りの貧乏暮しになつた。

佐々木の書き換えは、話の冒頭の主語を明示してわかりやすくしたことや、水中へ行く時や帰つてくる時の叙述が詳しいことなど、「内容」に及ぶところもある。しかし、それ以上に重要な違いは、方言を残しながら書かれたデス・マス調の文体を、ほとんど方言を残さないタ調の文体に換えたところにある。

こうして見てきてわかることは、佐々木が、三つのタイプのまったく異なる資料をその差異をできるだけなくすような文体に書き換える努力をしていることだ。「佐々木型の昔話になつて居て、紫波郡の昔話としては特質を失つた」と小笠原が感じるのは、当然であった。佐々木は、共通語で書き、会話などどうしても方言でなければならないところだけを残すという昔話叙述の方法を貫いている。音声で語られた話を忠実に文字化するのではなく、地域と時代とを越

えて享受することが可能な「読むための昔話」を残そうとするのである。^[12] 小笠原が、佐々木の取った方法について、「充分理由のあることであると思ふ」という「理由」とは、おそらくそのように説明することができる。

五、小笠原謙吉の批判

昭和八年九月、佐々木は仙台で亡くなつた。『岩手日報』の「佐々木喜善追悼号」（昭和八年十月二十日）に、小笠原は「佐々木喜善さんと私一『紫波郡昔話』のころから」という文章を寄せた。その中に、『紫波郡昔話』の刊行直後、佐々木から十冊が贈られ、その表紙の裏に次のような署名があつたことが記されている。

小笠原学兄御文庫に献呈す
誤植誤字だらけで真にあなたには御申訳御座いません いか
にして御わび申上げてよいか分りません 涙が流れまして御
座います

大正十五年三月一日

佐々木喜善

確かに丁寧に読むと、この本は「誤植誤字」が目立つ。そのためか、三月十八日の柳田の書簡には、「紫波昔話正誤既に着手しをり候付小笠原君の正誤表至急御遣し被下度候」とあって、佐々木の正誤表を受け取り、さらに小笠原の正誤表を求めたことが知られる。現在、これらの正誤表は、その所在を確認することができない。

小笠原は、『紫波郡昔話』と「鳥虫木石伝」は小笠原の提供した資料に拠ると佐々木が断つことを「学問に忠実なる学者の態度」であるとして「感謝」している。そうした気持ちは、『紫波郡昔話集』の「後記」まで変わらなかつたと思われる。その末尾には、「終りに故佐々木喜善氏の靈前に此書を捧げたい」と記している。これは、皮肉などではなく、当事者同志にしかわからない「感謝」の現れと見てよい。

しかし、柳田の「紫波郡昔話集序」を見ると、「二三別の人のした話を其中にまじへ、又僅かながら筆記とちがふことを書き込んで居るさうである。それを小笠原氏がいやがつて居られる」という話を、柳田は、「岩手の人」から何度か聞いたという。しかし、小笠原は「自分は不平を人に洩らした記憶は無い」と言つてゐる。おそらく小笠原自身の気持ちとは別に、話が一人歩きをしたのではないかと推測される。柳田は知らなかつたようだが、すでに見たように、『紫波郡昔話』は「二三別の人した話を其中にまじへ」という程度のものではなかつた。

柳田の誘いに応じて、小笠原は、『紫波郡昔話』が「内容は大分佐々木型の昔話になつて居て、紫波郡の昔話としては特質を失つたものは多い」ので、「祖母の昔話ばかりを拾つて、勉めて在りし日の面影を呼び起し、丹念に稿を綴つ」て、『紫波郡昔話集』を作り上げた。では、「佐々木型の昔話」に対して、「紫波郡の昔話」の「特質」をどのように考えていたのだろうか。小笠原は、「名称」を変え、本文に「註釈」を付けるなどしているが、昔話に関する考

えをはつきり述べてゐるわけではないので、残された昔話から考へてゆくしかない。ここでは、これまでの流れから、叙述の比較が可能なよう、前節の(c)で取り上げた事例に対応する話を引用してみる。

五 福の神よげない

昔あつたぢもな。南昌山さ門松迎へに行くと、笊淵さ鴨こは一羽浮んで居たがら、迎へて来た門松を淵さ投げると、鴨こも門松もちぶんと沈んで見なくなつた。すると淵から姉様は出で来て、今の門松の礼を謂ひ、おらほの家まであえで（来て）下さいといふから、なぞして此淵の底さ行くべと聞くと、姉様は、私さおぶ（負）さて、マナグ（目）をふく（瞑）てればよいといふから、其言ふなりになつて居ると、私の家さ行たら門松の礼に何かけると言ふから、其時はよげないを欲しいといつてございと姉様に教へられた。

暫くして目を開けてもよいと言ふので開けで見たら、いつもの間にか立派な座敷さ来て居て、色々御馳走を出されてお酒を戴き帰ることになると、門松の礼に何か望みの物をけるといふから、姉様に教へられた通りに、よけないを欲しいと言ふと、みたくない（醜い）がぶくれわらし（小供）を、けでよこすた。

これをおぶて來ると、よげないは途中で、お前の家さ行たら俺を陰にさ置てけると言ふので、連れて來て奥のでこ（出居）さ隠して置くと、其日がらトソ／＼トソ／＼と稼ぐので、きしたくには米は一杯にたまり、財布には錢はいつでもあるように

なつた。そこで、朝晩にそゝと（密）でこに這入ては、よげないを見て、にかつと笑て出で來きした。

それを嘆は見て居て、何しにとど（夫）はでこさ這入ては、にかつと笑て出で來るかと思て、とどの居ない時にでこさ行て見たが何も居ないので、そこら中を片付て見たら、すまこ（隅）の方からみたくないがぶくれわらしは、ちよこ／＼と出で來たのではぎ（簾）でうんと叩きのめして追出しと、其わらしはおいと泣きながら、外さ出で行つた。

するととどは帰て来て、いつものようにでこさ這入て見ると、よけないは居ないので顔色をかへて出で来て、嘆さでこを見たなと言ふたら、嘆は、見たも何も、お前は何処がらあたながぶくれわらしを連れて来て置いたかと謂ふから、とどは心配して、それではあのわらしをなぞにしたと聞くと、嘆ははぎで叩きつけたら、おい／＼泣ながらどこさが行てしまつたと謂ふので、とどはことやつた事（困）をした。あれはよけないと言ふ福の神で、笊淵の底がら貴つて來たものだと言ふて、ひどく力を落した。それからと言ふものは、きしね櫃に米は減り、財布には錢は無くなつて、又元の通りの貧乏暮しなつたとさ。どつとははらし。

この話には、「笊淵さ鴨こは一羽浮んで居た」という設定のように、小笠原の資料にも佐々木の昔話にも見られない「内容」もある。小笠原は、佐々木に提供した資料の控えを持つていたと思われるが、この話は控えをもとに書き換えたというよりも、その「内容」

の類似はもちろん、段落分けの一一致やタ調の文体の採用から見て、佐々木の『紫波郡昔話』をもとにして書き換えたと推定される。小笠原は、「祖母の昔話」の「在りし日の面影を呼び起し」と言いながら、その昔話は、もはや単なる記憶に留まらず、佐々木の昔話にすっかり呪縛されてしまっているのである。

小笠原の書き換えは、小笠原の原資料から見ても佐々木の昔話から見ても、会話のやりとりを簡略にするなどして、かなり簡潔な叙述にしている。しかし、その中で尊重されているのは、方言をできるだけ取り入れてゆくことだ。そのため、その部分の本文をひらがな表記にして、(一)内に漢字で意味を入れてゆくという表記を取つてゐる。そして、さらに「後記」では、「南昌山」「笊淵」「よげな」「ワラシ」「でこ」「嘆」「とど」「キシネ櫃」に関する「註釈」を加えている。小笠原は一貫して、昔話を語る紫波郡の言葉を明らかにしようとしている。こうして見ると、小笠原のいう「紫波郡の昔話」の「特質」とは、その「内容」ばかりでなく、それを語る言葉そのものにあつたのではないかと思われてくる。その書き換えは、佐々木が共通語に書き換えたことで抹殺してしまった語る言葉を取り戻す作業であった。佐々木が「読むための昔話」を書いたのに対抗して、小笠原は音声からなる昔話が本来持つてゐる言葉を引きだけ取り入れた「語られたような昔話」を書いたのだ、と言うことができる。

また、小笠原の書き換えには、小笠原の原資料にも佐々木の昔話にもない、「昔あつたぢもな」という語り始めと「どつとはらい」

という語り始めとが入つてゐる。これは、明らかに、柳田が「昔話採集者の為に」(『旅と伝説』、昭和六年四月)あたりから言い始めた昔話の定義に添うように、厳密な叙述に換えられた結果である。「紫波郡昔話集序」には、柳田の誘いに対して、小笠原が「もう一度整理して見たいとちやうど思つて居た際だから、出してもらへるなら有難い」という返事を寄越したとある。昔話を学問の対象として厳密にとらえてゆこうとする柳田の研究が進むのを見て、小笠原は書き換えを考えようになつたのではないかと思われる。しかし、「紫波郡昔話集序」にあるように、小笠原は柳田に原稿を送つた後急死して、この本を手にすることはなかつた。

(1) 山下久男『佐々木喜善先生とその業績』(遠野市教育委員会、昭和五十七年)。

(2) 以下、佐々木喜善に宛てた柳田国男の書簡は、『定本柳田国男集』別巻四(筑摩書房、一九七一年新装版)に掲げる。

(3) この問題については、金田一京助『佐々木喜善さんの事ども』(『ドルメン』、昭和九年五月)で触れている。なお、佐々木がそう考えた理由を、山田野理夫『柳田国男の光と影』(農山漁村文化協会、昭和五十二年)は「遠野物語の署名が柳田一人なので、喜善もそう軽く考えたのである」という。柳田はこの関係を解消するために、全国昔話記録では「編者」と「筆者」という区別を採用した。

(4) 成城大学民俗研究所の柳田文庫の『聴耳草紙』(三元社、昭和六年)では、この話に「子供ノ作カ」(柳田自筆ではない)。

赤のインク) という書き入れがある。

(5) 話名の上の番号は朱筆なので、佐々木が推敲の段階で記入したものであると知られる。

(6) 柳田国男「きつちよむ話研究の目標」(『人文』、大正十五年五月)。

(7) 矢巾町立煙山小学校の三浦保治校長の御教示による。

(8) 第21話は、「陸中紫波地方の桃太郎」と『紫波郡昔話』の「(一一) 桃ノ子太郎」になるが、叙述が異なる。同様ことは、第25話は、『紫波郡昔話』の「(九八) 狼の落胆」と『聴耳草紙』の「九一番 狼と泣兒」になり、資料Bの第16話は、原稿「昔嘶」と『聴耳草紙』の「九〇番 爺と婆の振舞」になるが、それらについても言える。佐々木は、二度目に原稿を書く時、もとの小笠原の資料に戻って書き換えをして、一度目の原稿や刊行物には関心を示していないことがわかる。

(9) 菅原七郎『紫波郡案内』(自刊、大正六年五月)の「紫波郡 小学校教員」の名簿の中に、本間龜松、佐久山幸之助、市村直躬、竹内次郎、戸塚玉司、広田勘次郎の名前がある。「幸之助」とあるが、「孝之助」と同一人物であろう。

(10) 佐々木の書き入れが参考になるが、十分に検討できていない。今回は、独自に話の内容を比較して対応関係を推定してみた。(11) 佐々木の死後、本山桂川が編集した『農民俚諺』(一誠社、昭和九年)では、第四回を見落としている。

(12) 高谷重夫「解説」(『岩手県紫波郡昔話集』(日本昔話記録)。

三省堂、昭和四十八年)) も、佐々木の『紫波郡昔話』が「土地のことばをほとんど標準語に直し、ただ色どりとして多少の方言を残す」のに対して、小笠原の『紫波郡昔話集』は「土地のことばを忠実に再現した」という。しかし、佐々木が最晩年に書いた「民謡の蒐集」(『綜合童話大講座1』、昭和八年二月十一月、五回)では、「伝承者が口から言つたまゝ筆録者が耳で聴いた儘、其儘其通りに筆録して置く」ことの重要さを認めながらも、「所々に地方固有の方言を差入れて其色合を出しつゝ内容を意外に深い所まで押詰めて行つた」文体がよいと言ふ。佐々木の方法を一概に否定することはできない。

(13) 佐々木は「序」で、「近郷の小学校の教師や生徒等から集めてくれられたもの」には「話に一々符号を付けて置いた」といふが、ほとんど落ちているために、多くが小笠原自身の伝承のようふうに読めてしまう。

(付記) 小笠原謙吉資料の閲覧に際しては佐々木広吉、佐々木一人、松田実、小笠原晋の各氏のご好意があった。また、三浦保治氏にも貴重なご教示を賜つた。諸氏に厚く御礼申し上げる。後日、小笠原謙吉資料の全容が明らかにされた時に、昔話叙述の方法や佐々木喜善の書き入れなどについて、論じ直してみたいと考えている。なお、本稿は、「『聴耳草紙』の方法」(『昔話研究と資料1』、平成七年六月刊行予定)と深いつながらがある。あわせてお読みいただければ幸いである。

(いいい・まさみ/東京学芸大学)

| 小笠原謙吉資料集 | 佐々木喜善の刊行 | 小笠原謙吉の刊行 |
|-------------------------|-------------------|-------------|
| A (小学生の書いた文章) | | |
| 1 「昔或処に一人ばくちうつがありました」 | 『紫波郡昔話』 13 | |
| 2 「昔南部盜賊の字を南部こぞうといった」 | 『紫波郡昔話』 16 | |
| 3 「或ル処ニ一間ノ家ガアリマシタ」 | | |
| 4 「或る所に一匹のさるがありました」 | 『紫波郡昔話』 39 | |
| 5 「昔或所にかはうそと狐とがありました」 | 『紫波郡昔話』 97 | |
| 6 「昔或所に猫とねずみとありました」 | | |
| 7 「或る所に馬鹿な男がありました」 | | |
| 8 「昔～大昔セゴキナ若者ガアリマシタ」 | | |
| 9 「昔或寺におしょうと小僧とがありました」 | | |
| 10 「維新の前の事であります」 | | |
| 11 「昔々或るところに父と母と娘とが」 | 『紫波郡昔話』 108 | 『紫波郡昔話集』 74 |
| 12 「或所ニ家ニ一人ノ子供ガアッテ」 | 『紫波郡昔話』 32 | 『紫波郡昔話集』 78 |
| 13 「昔或所ニ馬鹿者ガアリマシタ」 | 『紫波郡昔話』 109 | |
| 14 「昔或所に立派な家がありました」 | 『紫波郡昔話』 24 | |
| 15 「昔唐ニ大力坊ト云フ人在ヲ聞」 | | |
| 16 「或所に柿木太郎と云人がありました」 | 『紫波郡昔話』 96 | |
| 17 「昔或る所に、海岸に大変に富んだ家が」 | 『紫波郡昔話』 38 | |
| 18 「お寺が有り、こぞは、山に行きて来て」 | | |
| 19 「昔アル所にコンジャウノキタナイ」 | | |
| ◎昔話の材料 | | |
| 20 「昔シ或ル所ニ悪虎ハ居リマシテ」 | | |
| 21 「ある時父母が二人花見にいつて」 | | |
| 22 「或幾百年とすれない農夫があつた」 | 「陸中紫波地方の桃太郎」 | |
| 23 「昔成処にびんほな家あつた」 | 『紫波郡昔話』 12 | |
| 24 「或る観音様のそばに一人の馬鹿正直な男」 | 『紫波郡昔話』 106 | |
| 25 「或夜に内の子供がなきだしました」 | 『紫波郡昔話』 77 | |
| 26 「昔し昔しに馬鹿な男がありました」 | 『紫波郡昔話』 87 | |
| 27 「昔～大昔或る所に山の家からよめ入を」 | 『紫波郡昔話』 98 | |
| 28 「昔或所に兄弟が三人ありました」 | 『聴耳草紙』 91 | |
| 29 「或る所におじいさんとおばあさんと」 | 『紫波郡昔話』 26 | |
| 30 「昔の事南部小僧は父に向つて」 | | |
| B 私の小児の時冬の火達で祖母様から聞いた昔話 | (人間の始まり) | |
| 1 福の神『ヨケナイ』 | 『紫波郡昔話』 25 | |
| 2 角の権現様と黒川のお観音様 | 『紫波郡昔話』 1 | 『紫波郡昔話集』 5 |
| 3 大沼の主と五郎沼の主 | 『紫波郡昔話』 2 | 『紫波郡昔話集』 9 |
| 4 右エ門太郎に左エ門太郎 | 『紫波郡昔話』 3 | 『紫波郡昔話集』 48 |
| 5 鼻聞き | 『紫波郡昔話』 28 | 『紫波郡昔話集』 14 |
| 6 お僧様しヤア | 『紫波郡昔話』 4 | 『紫波郡昔話集』 10 |
| 7 糜ン福に米ン福 | 『紫波郡昔話』 14 | 『紫波郡昔話集』 6 |
| 8 鹿汁雁の汁 | 『紫波郡昔話』 8 | 『紫波郡昔話集』 12 |
| 9 運付いた金 | 『紫波郡昔話』 43 | 『紫波郡昔話集』 17 |
| 10 もんじやの吉 | 『紫波郡昔話』 5 | 『紫波郡昔話集』 49 |
| 11 陣岡左エ門に羽場松公 | 『紫波郡昔話』 64 | 『紫波郡昔話集』 26 |
| 12 瓜子姫子 | 『紫波郡昔話』 6 | 『紫波郡昔話集』 11 |
| 13 瓜子姫子 | 『紫波郡昔話』 7 | 『紫波郡昔話集』 1 |
| 14 『オチンコヘチンコ。ビービービーイ』 | 『紫波郡昔話』 99 | 『紫波郡昔話集』 34 |
| 15 『小僧まだか?』 | 『紫波郡昔話』 44 | 『紫波郡昔話集』 18 |
| 16 「ある処にぢとばとありました」 | (昔嘲) 『聴耳草紙』 90 | |
| 17 馬鹿聟 | 『紫波郡昔話』 33 | 『紫波郡昔話集』 56 |
| 18 馬鹿聟(其二) | 『紫波郡昔話』 34 | 『紫波郡昔話集』 58 |
| 19 長イモ十七本 | 『紫波郡昔話』 45 | 『紫波郡昔話集』 7 |
| 20 二斗一舛 | 『紫波郡昔話』 46 | 『紫波郡昔話集』 47 |
| 21 化け寺 | 『紫波郡昔話』 50 | 『紫波郡昔話集』 8 |
| 22 伊勢參り | 『紫波郡昔話』 55 | 『紫波郡昔話集』 21 |

| | | | | | |
|----|----------------------|---------|-------|----------|----|
| 23 | 伊勢参猫 | 『紫波郡昔話』 | 56 | 『紫波郡昔話集』 | 25 |
| 24 | 「長者殿のタンナ様は島に出て」 | 『紫波郡昔話』 | 10 | 『紫波郡昔話集』 | 53 |
| 25 | 島打 | 『紫波郡昔話』 | 9 | 『紫波郡昔話集』 | 50 |
| C | 紫波郡内に於ける口碑伝説及昔話集（一） | | | | |
| 1 | 泉と水無川原 | 「鳥虫木石伝」 | 13 | | |
| 2 | 東根太郎と八郎太郎 | 「鳥虫木石伝」 | 14 | | |
| 3 | 南僧坊 | 「鳥虫木石伝」 | 15 | | |
| 4 | 南昌山の青龍権現 | 「鳥虫木石伝」 | 16 | | |
| 5 | 笊渕と馬の足形石 | 「鳥虫木石伝」 | 17・18 | | |
| 6 | 葦毛渕 | 「鳥虫木石伝」 | 19 | | |
| 7 | 金塊伝説 | 「鳥虫木石伝」 | 20 | | |
| 8 | 五郎沼 | 「鳥虫木石伝」 | 21 | | |
| 9 | 白鬚水 | 「鳥虫木石伝」 | 22 | | |
| 10 | 釜渕の主 | 「鳥虫木石伝」 | 23 | | |
| 11 | 門林の大蛇 | 「鳥虫木石伝」 | 24 | | |
| 12 | 機織姫の窟 | 「鳥虫木石伝」 | 25 | | |
| 13 | ながされた王の事（あづま昔物語） | | | | |
| 14 | 岩清水右京が宅妖怪の事（あづま昔物語） | | | | |
| 15 | 飯岡城印の杉の事（志波軍記） | | | | |
| 16 | 陣ヶ岡（志波軍記） | | | | |
| 17 | 志波の家来宮手平沢が事（志波軍記） | | | | |
| 18 | 大日堂の怪石 | 「鳥虫木石伝」 | 26 | | |
| 19 | 山吹川の名の起り | 「鳥虫木石伝」 | 27 | | |
| 20 | 五郎沼から掘り出した古碑の由来 | 「鳥虫木石伝」 | 28 | | |
| 21 | 砂子塚 | 「鳥虫木石伝」 | 29 | | |
| 22 | 河童を産した家の話 | 「鳥虫木石伝」 | 30 | | |
| 23 | 山男の出た家 | 「鳥虫木石伝」 | 31 | | |
| 24 | 福の神は牛であつたと云ふ家 | 「鳥虫木石伝」 | 32 | | |
| 25 | 一人娘の成功しない部落 | 「鳥虫木石伝」 | 33 | | |
| 26 | チヤグ～馬子 | 「鳥虫木石伝」 | 34 | | |
| 27 | 河童の証文を有する農家 | 「鳥虫木石伝」 | 35 | | |
| 28 | 湯壺堤の由来 | 「鳥虫木石伝」 | 36 | | |
| 29 | 東根太郎の下駄の跡形 | 「鳥虫木石伝」 | 37 | | |
| 30 | 月の輪形 | 「鳥虫木石伝」 | 38 | | |
| 31 | 彦部石が森の事 | 「鳥虫木石伝」 | 39 | | |
| 32 | 小笠原系の紋所 | 「鳥虫木石伝」 | 40 | | |
| 33 | 火災の際飛んで出た十月仏 | 「鳥虫木石伝」 | 41 | | |
| 34 | 二歳胡麻に三歳胡麻 | 『紫波郡昔話』 | 111 | 『紫波郡昔話集』 | 4 |
| 35 | 阿野様 | 『紫波郡昔話』 | 114 | 『紫波郡昔話集』 | 30 |
| 36 | 門前の家婦 | (門前の家婦) | | | |
| 37 | ドントの虎と古屋のムル | 『紫波郡昔話』 | 115 | 『紫波郡昔話集』 | 73 |
| D | 紫波郡内に於ける口碑伝説昔話資料集（二） | | | | |
| 1 | 柿の木太郎（再話） | 『紫波郡昔話』 | 11 | 『紫波郡昔話集』 | 51 |
| 2 | 川瀬と狐（再話） | 『紫波郡昔話』 | 84 | 『紫波郡昔話集』 | 39 |
| 3 | 驕子誕子 | 『紫波郡昔話』 | 100 | 『紫波郡昔話集』 | 33 |
| 4 | 橋の下に剃刀こが居る | 『紫波郡昔話』 | 85 | 『紫波郡昔話集』 | 38 |
| 5 | 馬鹿聟の話 | 『紫波郡昔話』 | 93 | | |
| 6 | ブブとアエカンの二人の小僧 | 『紫波郡昔話』 | 86 | 『紫波郡昔話集』 | 60 |
| 7 | せつとこ | 『紫波郡昔話』 | 102 | 『紫波郡昔話集』 | 68 |
| 8 | 牛方 | 『紫波郡昔話』 | 83 | 『紫波郡昔話集』 | 40 |
| 9 | 播磨の国糸長障子 | 『紫波郡昔話』 | 60 | 『紫波郡昔話集』 | 24 |
| 10 | ニソク四ソク | 『紫波郡昔話』 | 42 | 『紫波郡昔話集』 | 16 |
| 11 | 六地蔵に恩をおくられた話 | 『紫波郡昔話』 | 37 | 『紫波郡昔話集』 | 59 |
| 12 | 牛こは死んで長者になつた話 | 『紫波郡昔話』 | 58 | 『紫波郡昔話集』 | 22 |
| 13 | 桃壳り | 『紫波郡昔話』 | 59 | 『紫波郡昔話集』 | 23 |
| 14 | 爺ナのコバカマ | 『紫波郡昔話』 | 30 | 『紫波郡昔話集』 | 55 |
| 15 | 夕顔長者 | 『紫波郡昔話』 | 31 | 『紫波郡昔話集』 | 67 |
| 16 | 打たん太鼓に鳴る太鼓 | 『紫波郡昔話』 | 29 | 『紫波郡昔話集』 | 15 |
| 17 | 猿の夜盗 | 『紫波郡昔話』 | 107 | 『紫波郡昔話集』 | 29 |
| 18 | レレペ | 『紫波郡昔話』 | 52 | 『紫波郡昔話集』 | 62 |

| | | | | | |
|--------------------------|-----------------|---------|------------|----------|----|
| 19 | こゝもオレの処だ | 『紫波郡昔話』 | 49 | 『紫波郡昔話集』 | 77 |
| 20 | 胸で小豆を煮る | 『紫波郡昔話』 | 48 | 『紫波郡昔話集』 | 75 |
| 21 | 柱がくす | 『紫波郡昔話』 | 105 | | |
| 22 | アヲリの屏風 | 『紫波郡昔話』 | 47 | | |
| 23 | 馬鹿聟 | 『紫波郡昔話』 | 104 | 『紫波郡昔話集』 | 35 |
| 24 | 馬鹿聟 | 『紫波郡昔話』 | 92 | 『紫波郡昔話集』 | 31 |
| 25 | お吉にお玉 | 『紫波郡昔話』 | 94 | 『紫波郡昔話集』 | 32 |
| 26 | 梵天王 | 『紫波郡昔話』 | 95 | | |
| 27 | 山梨の化物 | 『紫波郡昔話』 | 36 | 『紫波郡昔話集』 | 37 |
| 28 | 娘に蛇の通つた話 | 『紫波郡昔話』 | 89 | 『紫波郡昔話集』 | 2 |
| 29 | 黄金の成る吹花 | 『紫波郡昔話』 | 90 | 『紫波郡昔話集』 | 52 |
| 30 | 夕顔の姑殿 | 『紫波郡昔話』 | 21 | | |
| 31 | 葦毛の馬が迎へに来た娘 | 「鳥虫木石伝」 | 10 | | |
| 32 | 志波の大龍 | 「鳥虫木石伝」 | 11 | 『紫波郡昔話集』 | 54 |
| 33 | アツキトギ | 『紫波郡昔話』 | 19 | | |
| 34 | 火柱を切つた話 | 『紫波郡昔話』 | 20 | | |
| 35 | 長い名をつけて川に流れた子供 | 「鳥虫木石伝」 | 1 | | |
| E 紫波郡内に於ける口碑伝説昔話集（三） | | | | | |
| 1 | 貧乏神の話 | 「鳥虫木石伝」 | 12 | | |
| 2 | ザシキワラシ | 「鳥虫木石伝」 | 9 | | |
| 3 | 安珍の別譚 | 『紫波郡昔話』 | 27 | 『紫波郡昔話集』 | 13 |
| 4 | 浮島明神 | 『紫波郡昔話』 | 76 | 『紫波郡昔話集』 | 42 |
| 5 | 徳田の古碑 | 『紫波郡昔話』 | 35 | 『紫波郡昔話集』 | 57 |
| 6 | お諏訪堂の本尊 | 『紫波郡昔話』 | 66 | 『紫波郡昔話集』 | 27 |
| 7 | キシネ留 | 『紫波郡昔話』 | 81 | 『紫波郡昔話集』 | 43 |
| 8 | 馳の化物 | 『紫波郡昔話』 | 82 | 『紫波郡昔話集』 | 3 |
| 9 | 河童の居なくなつた堰 | 『紫波郡昔話』 | 91 | 『紫波郡昔話集』 | 36 |
| 10 | 豆子一つ | 『紫波郡昔話』 | 88 | 『紫波郡昔話集』 | 44 |
| 11 | お寺を焼いたお尚さん（再話） | 『紫波郡昔話』 | 40 | | |
| 12 | 毒梨 | 「鳥虫木石伝」 | 2 | | |
| 13 | 仙北町のトンテキ | 「鳥虫木石伝」 | 3 | | |
| 14 | 屁で梨を落した女 | 「鳥虫木石伝」 | 4 | | |
| 15 | こかの幸太 | 『紫波郡昔話』 | 6 | | |
| 16 | 山々の尻びりオンチ | 『紫波郡昔話』 | 5 | | |
| 17 | 物を食はない妻 | 『紫波郡昔話』 | 7 | | |
| 18 | もんぢやの吉馬を売る | 『紫波郡昔話』 | 8 | | |
| 19 | 尻でぬす人を追つた話 | 『紫波郡昔話』 | 112 | | |
| 20 | 白沢ヨテ公に馬場松公（再話） | 『紫波郡昔話』 | 74 | 『紫波郡昔話集』 | 76 |
| 21 | 黒岩川右エ門 | 『紫波郡昔話』 | 62 | 『紫波郡昔話集』 | 79 |
| 22 | 化け石 | 『紫波郡昔話』 | 63 | | |
| 23 | 五右エ門石 | 『紫波郡昔話』 | 41 | | |
| 24 | 岩窟 | 『紫波郡昔話』 | 103 | | |
| 25 | 乱獅子荒五郎 | 『紫波郡昔話』 | (狐に誑された先生) | | |
| 26 | 松森甚兵エ | 『紫波郡昔話』 | 72 | | |
| 27 | 潟の主 | 『紫波郡昔話』 | 15 | | |
| 28 | チヤグ～馬子追記 | 『紫波郡昔話』 | | | |
| 29 | 石で尻をぬぐつた話 | 『紫波郡昔話』 | | | |
| F 紫波郡に於ける口碑伝説昔話集（四回）（五回） | | | | | |
| 1 | ばかむこ | 『紫波郡昔話』 | 71 | 『紫波郡昔話集』 | 77 |
| 2 | 和尚さま | 『紫波郡昔話』 | 70 | 『紫波郡昔話集』 | 75 |
| 3 | 和尚さま | 『紫波郡昔話』 | 54 | | |
| 4 | せつこき男 | | | | |
| 5 | とつき男（仙北のトンテキ参照） | | | | |
| 6 | 狐に誑された先生 | | | | |
| 7 | 鬼にさらはれた女（梵天王参照） | | | | |
| 8 | 狐に誑された男 | | | | |
| 9 | ばかむこ（せつとこ参照） | | | | |
| 10 | せつこき男 | | | | |
| 11 | 愚か太郎 | | | | |
| 12 | 翁と猿 | | | | |

| | | | | |
|------------|-----------------------|---------|-----|-------------|
| 13 | 男の歳暮賈 | 『紫波郡昔話』 | 17 | |
| 14 | 馬鹿太郎 | 『紫波郡昔話』 | 23 | |
| 15 | ぬかぶくろとべにざら(米福とぬかん福参照) | 『紫波郡昔話』 | 73 | |
| 16 | おほしとおつき | 『紫波郡昔話』 | 79 | |
| 17 | 豆切丸の由来 | | | |
| 18 | 金の鳥 | | | |
| 19 | 耳取り | | | |
| 20 | 返し田 | | | |
| 21 | 姉妹地蔵 | | | |
| 22 | 河童 | | | |
| 23 | 蝦蟆 | | | |
| 24 | おはつ渕 | | | |
| 25 | 沼のぬし | | | |
| 26 | 金時の枕つき岩 | | | |
| 27 | 才津川のぬし | | | |
| 28 | 参殿寺の紫臂 | | | |
| 29 | 恩に感じた狼 | | | |
| 30 | 蛇骨(乱獅子と荒五郎参照) | | | |
| 31 | 夜泣松 | | | |
| 32 | 足駄の瘤石 | | | |
| 33 | 河童相伝の薬 | | | |
| 34 | 二所の闘の事 | | | |
| 35 | 霧山牧之助 | | | |
| 36 | 刈田に舞鶴の森 | | | |
| 37 | 馬蹄石 | | | |
| 38 | 不飲川 | | | |
| 39 | 蛇秀留 | | | |
| 40 | 河童堤 | | | |
| 41 | ザシキワラシ | | | |
| 42 | 十月仏に耳を取られた権現様 | 「鳥虫木石伝」 | 42 | |
| 43 | てんぼう競べ | 『紫波郡昔話』 | 110 | 『紫波郡昔話集』 65 |
| * 昔話を集めた後に | | | | |
| 44 | 芦毛馬立山 | | | |
| 45 | 砥掘 | | | |
| 46 | 犬吠森 | | | |
| 47 | 坊主石 | | | |
| 48 | 扇と石棒 | 「鳥虫木石伝」 | 44 | |
| 49 | アヅキトギ | 「鳥虫木石伝」 | 43 | |
| 50 | スリコギ | 『紫波郡昔話』 | 113 | 『紫波郡昔話集』 66 |
| G 紫波郡昔話資料集 | | | | |
| 1 | 石で尻をぬぐつた話(訂正) | | | |
| 2 | 蛇が娘を貰つた話 | 『紫波郡昔話』 | 75 | |
| 3 | チョヘンコ・チャハンコ | 『紫波郡昔話』 | 101 | |
| 4 | 山伏の話 | 『紫波郡昔話』 | 78 | |
| 5 | タコ馬 | 『紫波郡昔話』 | 53 | 『紫波郡昔話集』 20 |
| 6 | 爺ナと狼 | 『紫波郡昔話』 | 22 | |
| 7 | 柱餅 | 『紫波郡昔話』 | 18 | |
| 8 | オカエモンコ | 『紫波郡昔話』 | 57 | 『紫波郡昔話集』 63 |
| 9 | チョヘンコ・チャハンコ | 『紫波郡昔話』 | 80 | 『紫波郡昔話集』 45 |
| 10 | うば皮 | 『紫波郡昔話』 | 67 | 『紫波郡昔話集』 28 |
| 11 | 玉一 | 『紫波郡昔話』 | 68 | 『紫波郡昔話集』 46 |
| 12 | 三人の聾 | 『紫波郡昔話』 | 51 | 『紫波郡昔話集』 61 |
| 13 | 門前の柱 | 『紫波郡昔話』 | 61 | 『紫波郡昔話集』 64 |
| 14 | モンヂヤの吉と釜 | 『紫波郡昔話』 | 65 | 『紫波郡昔話集』 19 |
| 15 | 山に放ちた老人 | 『紫波郡昔話』 | 69 | 『紫波郡昔話集』 41 |
| | | | | |
| | | | | 『紫波郡昔話集』 69 |
| | | | | 『紫波郡昔話集』 70 |
| | | | | 『紫波郡昔話集』 71 |
| | | | | 『紫波郡昔話集』 72 |